
万灯籠お月さん

新辺カコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

万灯籠お月さん

【Nコード】

N4178T

【作者名】

新辺力コ

【あらすじ】

月のきれいな、祭りの夜。少年は何を思い、少女は何を決意する…。

弥三郎は、幼い頃からそうだった。原っぱに寝そべっていると嫌なことを忘れられるのだ。

だから今夜もこうして、原っぱで寝そべっている。

気が立っているせいか、月明かりがいつもより眩しい。弥三郎は舌打ちし、寝返りをうった。夜露に濡れた草が、顔をじんわりと撫でる。

普段なら例えようもなく気持ちが悪い筈だが、月がまともに見えなくなる分、随分ましに思えた。

「ふゆ……」

ため息と共に、ひとつ年上の想い人の名がまろび出る。パッチリとした眼を持つ、今年で十四になるお転婆娘だ。

遠くから、祭り囃子が聞こえてくる。灯籠だろうか。灯りが灯っているのも見える。そういえば、今日は村の祭りだったな……と、弥三郎はぼんやりと思う。

ふゆは祭りを見に行っているのだろうか。賑やかなところが好きな娘だから、きっと行っているのだろうな。と思った矢先、

「弥三郎、や、さ、ぶ、ろー。今日は祭りだぞ。見に行かんのか？」

「……ふゆ！」

パッチリとした眼の少女が、そこにいた。弥三郎は慌てて起き上がる。

「おまえこそ、見に行かんのか？ もうすぐ、踊りもはじまる」

ふゆはケラケラと笑い、夜露に濡れるのも構わず、というより気にせず、弥三郎のそばに腰を下ろした。

「弥三郎が行かんのなら、おらも行かん」

「でも、おまえにとって最後の……」言葉は、ふゆの強引な口づけで不自然に途切れた。桜の花びらのように可憐で柔らかな唇が、弥三郎の口を塞ぐ。何でもないことのように、そつと口を拭う彼女に、弥三郎はただ戸惑うばかりで。

今夜の月は冴え冴えと蒼くて、そして悔しいほどに明るい。

「みーんな、祭りに浮かれとる。誰も見とらんわ」

「そついう問題ではなかるうが！」

弥三郎は赤面し、照れ隠しか、声を荒げた。

「よりによつて、今する事は……」

弥三郎のぼやきに、ふゆはキツパリと答える。

「今だからじゃ」

と。

「明日にはもう、おらは村を出るんじやから」

ふゆは、淡々と続ける。さっき弥三郎に口づけたときと同じく、何でもないことのように。

弥三郎はぼんやりと思う。

（ふゆは……こんなに大人びとったろうか）

蒼い月明かりの下、ふゆの肌は白粉でもはたいたように白く、触れれば吸い付くのではないかと思うほどにきめ細かく見える。

思わず、見とれた。

「万灯籠……か」

ふゆは月を見上げ、つぶやいた。

「まんどろな、綺麗な月じゃな……」

まんどろとは、『万の灯籠』。明るく輝く月を指すとき、この辺りではこう言う。

「弥三郎。月は覚悟を決めたものにはとても優しいんじや。……」

…芸妓屋には、自分から行くと言った」

月をしっかりと見つめたまま、ふゆは言った。その眼はパツチリと見開かれ、一片の曇りもない。

『芸妓屋に行く』という言葉にも、悲痛な影は落ちてはいなかった。

寧ろ、『さあ、これから一仕事するか』とでもいうような、いっそ清々しいといってしまう表情だ。

なぜ、そんな顔が出来るのか。弥三郎にはわからない。

ふゆが今、どんな状況下におかれているか知っているから。だからこそ、わからない。

ふゆの家が苦しいのは知っていた。

子守奉公をしくじり、家に返された妹がいるのを知っていた。

とりわけ、ふゆがまだ幼いその子を可愛がっていることも、その子が芸妓屋に売られそうになっていることも。そして、

ふゆの家に、女衛が来たことも……。

全て、知っていた。

だが、弥三郎に何が出来たろう？ 想い人とはいえ、所詮は他人の問題だ。冷たいようだが、よその男が口を出せるような事ではなかった。ましてや、弥三郎は男とはいえ、まだ少年だ。攫って逃げることにすらかなわない。そんな事をすればもつとまずい事になることはわかっている。

ただ、齒噛みして時が過ぎるのを待つことしか出来ない。

「ふゆ……。なんでそんな、晴れ晴れとした顔が出来るんじゃ。なんでそんな、すましていられるんじゃ！ ……わしには、わからない……」

ふゆはちよつと困ったような顔をみせた。ほんの一瞬だが。

「……寒ければ寒いほど、月は明るく光るんじゃ。やさしく、人を照らすんじゃ。……弥三郎、おらは月になると決めた。やさしく光る、月に」

おらがしょんぼりしておつたら、妹も泣くじやろう……それは、イヤじゃ。とつても厭なんじゃ……！　そう、ふゆは結んだ。

「それでも、わたしにはわからん……。ふゆがつらい目に遭うことはないじやろ！」

「弥三郎！」

ふゆの口調が強くなる。

「おらを哀れむな。おらは生きるために、芸妓屋に行くんじゃ。売り込みに行くくらいの気概である。だから……哀れむな」

その言葉は固く、朝露のように清らかに澄み、明るかった。

（きれいじゃ……）

弥三郎は、場違いに思う。

やはり、見つめられると気恥ずかしいのか、今更ながらふゆは頬を染めた。

「父様、母様や妹に、笑って見送れとは言わん。望みもせん。……でも弥三郎、お前には笑って見送ってもらいたい。お前の笑った顔を、目に焼き付けて村を出たい」

無力な己を呪いながら、弥三郎はただ黙って聞いていた。
月明かりが、とても眩しい。

ふゆは、月になると言った。
寒ければ寒いほど、やさしく光る月になると。

でも、寒い思いをして光る月は、いったい誰が照らしてくれるのだろう。誰が労ってくれるのだろう？

弥三郎は顔を上げ、月を見つめた。さっき、ふゆがそうしたように。

蒼く、強い月明かりが降り注ぐ。
眼に、体に、心に降り注ぐ。

「本当じゃ……。月は、覚悟を決めたものには優しいの……」

弥三郎は、すっと立ち上がる。

「ふゆ。わしは、月にはなれん。でも……お前を一時照らす灯籠にはなれる。なつてやる。……わしは決めたぞ。お前をきつと、笑って見送ってやる」

「弥三郎……！」

風に乗って、祭り囃子が聞こえてくる。踊りにはまだ、間に合うだろう。

「どうする？ 行くか？」

「このままお前と一緒にいたい。……今夜はずっと」

二人は微笑みあい、何事か囁く。
月明かりの下、ふたつの影がひとつに重なる。

睦言は、月だけが知っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4178t/>

万灯籠お月さん

2011年10月8日19時51分発行